

奈良時代 道鏡 と 桓武天皇 と 最澄

桓武天皇 「さあ、私は誰かと申しますと、奈良時代から平安時代へと歴史を動かした男、そうです桓武天皇です」

道鏡 「ただ都を引っ越したただけな気もしますが」

最澄 「そして私、新しい仏教の可能性を開いた住所は比叡山延暦寺、天台宗の最澄です。」

道鏡 「大きく出たなあ。むしろ平安時代の仏教だろ最澄は」

桓武天皇 「以上、この二名で奈良時代のお話させてもらおうかなと思ってます」

道鏡 「待て待て待てい。私は？」

桓武天皇 「あ、これはこれはエロ坊主さん。」

道鏡 「エロ坊主なんてあだ名一番ダメですよ、弓削道鏡って名前あるんですから」

最澄 「え、何でエロ道鏡さんここにいますか？」

道鏡 「いるでしょそりゃ。奈良時代と言えば、仏教ブームですよ、てことは必然的に、仏教と愛の伝道師弓削道鏡（ゆげのどうきょう）は欠かすわけにはいかないでしょう？」

最澄 「え、何？奈良時代って仏教ブームのイメージですか？」

道鏡 「お前だって海渡って仏教学んでたる？みんなこぞって中国で仏教学んだり、坊さん呼んで来たり」

最澄 「(客に) 皆さんどうです？奈良時代っていうと仏教ブームってイメージあります？」

桓武天皇 「奈良時代といえば、やっぱり私はね奈良に都があったってイメージ」

道鏡 「まんますぎでしょ、奈良に都があったから奈良時代なんですから」

桓武天皇 「あと、あつという間の時代だったってイメージ」

道鏡 「ま確かに奈良平城京に都をおいたのが710年納豆の年で、794うぐいすの平安京へ引っ越すまでの80年ちよいの時代でしたからね」

桓武天皇 「他になんかある、奈良時代のイメージ？」

最澄 「私は藤原氏が天皇家にへっついてでしゃばりだした時代ってイメージですね」

桓武天皇 「あー確かに。大化の改新で有名な中臣鎌足が藤原の姓もらった流れ

からだよねえ」

最澄 「次の平安時代でさらに力つけましたからね」

道鏡 「ままま藤原氏の台頭もあつたでしょうけど、奈良時代といえば、やっぱり政治と仏教がうまく融合した時代っていうか」

桓武天皇 「そうだっけ？そんな僧侶で有名な人いた？最澄くん以外」

最澄 「僕以外の僧侶で優れてたっていうと空海さんぐらいですかねえ。」

桓武天皇 「空海はいいね、高野山金剛峰寺で私お腹空いちやった時、【食うかい？】
つておむすびくれたし」

道鏡 「ただの駄洒落でしょうが。最澄も空海も仏教説き始めたの平安京に移った後だから平安仏教でしょ。」

最澄 「空海とともに奈良時代からいましたから」

道鏡 「だから奈良時代はまだ修行してただけでしょ。そして山にこもった平安仏教と政治に密着してる奈良仏教と一緒にしてもらっちゃ困るんですよ」

桓武天皇 「いち宗教が政治に関与してる方が困りもんなんだけど」

最澄 「え、じゃあ誰か他いましたっけ？奈良仏教の有名な僧侶って」

道鏡 「色々いるよ、鑑真とか」

最澄 「あー鑑真ね、いちいち仏教広めに中国からきた」

桓武天皇 「あの坊さん、何回も船遭難しても来てたよね、しぶとかった」

道鏡 「しぶといは余計でしょ、あとで聖武天皇お気に入りで行基さんとか。」

最澄 「あー、行基ね。東大寺盧遮那仏建立に関わった？」

桓武天皇 「無駄にでっかい奈良の大仏ね」

道鏡 「無駄にでっかい余計でしょ、聖武天皇の想いがあつての大きさです」

桓武天皇 「聖武天皇はビビリだから流行病とか災害とかで誰かが死ぬとすぐ仏教にすがつてたし。」

最澄 「あちこちに無駄に国分寺やら国分尼寺とか建ててましたしね」

桓武天皇 「あれは相当、経費無駄遣いよ、寺ばっか建てて。賤民とか奴婢（ぬひ）とか奴隷みたいな扱いで狩り出してたしね」

道鏡 「それだけ世の中が不安だったからすがる力が欲しかったんですよ。」

中国真似した律令制の定着にも苦労してましたし」

桓武天皇 「仏教だけでヒトの心静まらないから。ましてや誰とは言わないけど道鏡つてやつみたいにさ、自ら天皇になろうとしてた坊主が政治に口

を挟んでくるなんてのは」

道鏡 「いや、私進んで天皇になろうとしたわけじゃないですよ、宇佐八幡宮で、神のご信託です、道鏡さんが天皇になれば国はおさまるって」

最澄 「そんなわけない、嘘だって言われたし」

道鏡 「誰が言われたんですか」

最澄 「和氣清麻呂」

道鏡 「わけがわからない」

桓武天皇 「わけわかるだろ、そして和氣清麻呂とわけがわからないをかけるのやめてもらえるかな」

最澄 「そういう嘘までついて、女帝の孝謙天皇までも手玉にして実権握ろうとしたわけですか、エロ坊主さんは」

桓武天皇 「そうだよ後世まで伝わってるからな、道鏡が女天皇を自慢のあれで手名付けてるって」

最澄 「そうそう正座をすると、膝が三本あるみたいって言われてる自慢のあれで」

道鏡 「へんな噂まわさないでもらえますか？」

桓武天皇 「けど絶対男女の関係にあったでしょ、孝謙おばさんと」

道鏡 「いや孝謙天皇には近づいてませんよ、称徳天皇には近づいただけで」

最澄 「それ同一人物！孝謙天皇が一回天皇ゆずってもつかい即位した時に改名したのが、称徳天皇だろうが。」

道鏡 「いやあの女帝が私を頼ってくるから」

桓武天皇 「なににせよ、仏教に頼りまくってお金いっぱい使って、そういうのがもう消したい汚点なの、奈良時代の」

道鏡 「そこまで言うなら言わせてもらいますけど、桓武天皇のほうが無駄遣いしてたでしょ」

桓武天皇 「は？どこが」

道鏡 「都あちこち引っ越しさせたでしょ、あれで朝廷、引っ越し貧乏ですよ！」

最澄 「桓武天皇は、引っ越しばっかしてたわけじゃないよ」

桓武天皇 「そうフオローしてあげて」

最澄 「他に坂上田村麻呂を征夷大將軍にして蝦夷征伐したり、勘解由氏たてて、地方で悪い事してる国司監査させたり、ああ、それもすごいお

金かかったああ！」

桓武天皇 「フオローになってない！あれで朝廷の権力拡大できたんだよ！」

道鏡 「藤原種継に唆されて、移した長岡京。いや正確には移そうとして途中で中止にした長岡京遷都、あれも引越し貧乏ですよね。」

桓武天皇 「だってあれは、全権任せた藤原種継くん暗殺されちゃったし。崇りとか続いたし」

道鏡 「で、それでも引越し懲りたかなと思ったら、結局今度は、平安京に遷都しようって言うし、わけがわからないですよ」

桓武天皇 「あ、わけがわからないって言った今、それで思い出したけどあれね、和気清麻呂が平安京に移しましよって言って」

道鏡 「それこそわからないですよ。和気清麻呂にちなんで発言しないでくださいよ。あいつ大嫌いなんですよ、私を追い出しましたし」

最澄 「桓武天皇はね、平城京での仏教と癒着した政治を心機一転したかったんですよ、その何が悪いんです？」

桓武天皇 「そーそー、もっと言ってやって最澄ちゃん」

最澄 「(客に) 皆さんもどう思います？例えば恋人と同棲してたとするですよ。で恋人と別れた後、その思い出がいっぱいの部屋に、まだずっといたいと思います？」

桓武天皇 「心機一転の例えが下手すぎる！」

道鏡 「引越すのはまいいですよ。ただそこまでお金かけて、平安京に遷都する意味あったんですかって事ですよ、相当、財政を逼迫させちゃったんじゃないですか？794年に」

桓武天皇 「ああ、794年ね。・・なくよウグイス、よりむしろ私が」

道鏡 「そりゃ泣くでしょうね、貧乏財政ですから」

桓武天皇 「ただそこから明治時代に東京に移すまでずっと京都が都として機能してたからね。江戸時代の時も、江戸には幕府あるけど都は京都だから」

道鏡 「話逸らさないでくださいよ、なんでそこまでして遷都したかったのかっての聞いてるんですよ」

桓武天皇 「あああもううるせえなあ、坊主の分際で天皇に向かって。さっき最澄が言ったろ。奈良の平城京じゃ、仏教が政治にどんどん癒着してるし、癒着の極めつけでどっかの坊主と天武の血をひく女帝がちちくり

あつてるし、もうそういう空気の中から脱出したかったんだよ！」

最澄 「・・・子供みたいな逆切れ・・・」

桓武天皇 「おまけに聖武天皇も、その娘でビッチの孝謙天皇も、天武天皇の血筋だろうがよ。その後即位した私がそこにいるのが嫌だったんだよ」

最澄 「そ、それまでずっと天武天皇の血筋で、桓武天皇は、お兄様の天智天皇の方の血筋でしたもんね」

桓武天皇 「そもそも天智天皇は、その息子の天智天皇に後継がせたんだよ。それが天智天皇の弟の天武天皇が壬申の乱おこして即位しちゃってさ、そっからおかしいよね」

道鏡 「だから桓武天皇はもっかい天智ルートに帰したかったって事ですかね？」

桓武天皇 「そうだよ、もっかい場所移して一からやり直したかったんだよ文句あんのかよ、あ？」

道鏡 「キヤラが完全に変わってる」

桓武天皇 「だから、最澄と空海を中国いかせたのも政治に食い込んでこないクリンなニュー仏教をやり直そうとしたんだよ！それが平安仏教だよ。」

最澄 「元来、宗教というものはごく個人の内側のものですから。」

桓武天皇 「そういう事だよ、何か他に聞きたいことは？」

道鏡 「あ・・・え、っと、いや」

桓武天皇 「奈良時代はこんな程度だよ。他何もでてこないよ、結論的に言えば、奈良時代の道鏡はヤリチン坊主だったって事だよ」

道鏡 「どういう結論なんですか！だから証拠もないのに変な噂流さないでくださいよ。私だっで一応、みんなのことを思ってあれこれ政関わったんですから」

桓武天皇 「ほう、例えば」

道鏡 「墾田永年私財法を一旦ストップしたとか」

最澄 「うわあ懐かしい法律名でできましたね、なんでしたっけ、それ。」

道鏡 「その頃中央集権の律令制だったから全部朝廷が土地所有してたでしょ？それをみんなに分け与えますよーっていう法律」

最澄 「あ、財源確保のためにやったやつだ。そっから土地与えるからそこからの税を納めるっていう**制度の【はしり】**の」

道鏡 「だからそれを僕ストップしたんですよ」

桓武天皇 「何でだよ、エロくないから？」

道鏡 「違いますよ。結局、農民達たちも負担苦しくてこつそり貴族とか寺院とかに土地プレゼントしちゃったりしたんですよ。で貴族とか寺院は自分の土地、荘園として持てるから土地貯め込んで私腹を肥やす輩が台頭してきちゃったりして。だからストップしたんですよ」

桓武天皇 「そうか、心配するな、お前の死後、そのストップを解除した」
道鏡 「なぜ！」

桓武天皇 「お前の言ってる事は正しいかもしれないがお前がキライだからだ」

道鏡 「すごい私的な感情！私も嫌いな藤原氏だって土地いっぱい困ったから力つけて摂関政治始めちゃったんですから」

最澄 「ただ、その後、土地広げて力つけた輩は藤原氏だけではないですか
ら」

道鏡 「あ、そうなの？」

最澄 「さらにそれより後に、貴族をぶつつぶす武士という存在が台頭する時代になっていきますから」

道鏡 「武士？その存在までは知らなかった」

最澄 「そこから出て来た武士で、平家ってのがいましてね」

道鏡 「平家？」

最澄 「そう平家の有名人だと、平将門とか平清盛とかね。あの平家のおかげで藤原氏もおいやったし。そして何をかくそう、その平家のルースはなんと、ここにおられる桓武天皇なんです」

桓武天皇 「どうも、平家の先祖、桓武天皇でございます」

道鏡 「うわあ、そんな後世まで根回ししてたんですね、桓武さん、じゃその先、また桓武天皇の血筋たちの栄華が始まる時代がずっと続くんですか」

最澄 「まあ、あの、ずつつていうか、最終的には平家も、源氏って別の武士にやられちゃうわけですけども・・・」

道鏡 「あ・・諸行無常だ」

桓武天皇 「泣くよウグイスより私」

道鏡 「もうええわ」